The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『花鳥余情』『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記 : 歌学から物語注釈への一過程
Author(s)	松本, 大
Citation	詞林. 2012, 52, p. 39-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67648
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『花鳥余情』『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記

――歌学から物語注釈への一過程――

松本　大

一、はじめに

『源氏物語』の注釈書である一条兼良『花鳥余情』[1]には、次のような注記が存在する。

『花鳥余情』若菜下巻

うきにまきれぬ恋しさの
恋しさのうきにまきるゝ物ならは又二たひと君をみましや大弐三位

物かたりより後の歌也　不可為証歌也

右は若菜下巻において、女三宮への対応に思い悩む光源氏の心内を述べた箇所に付された注記である。ここで『花鳥余情』は、『後拾遺集』七九二番歌である大弐三位の和歌を引歌として提示している。しかし注目すべきは、傍線部において、この引歌が詠歌時期の観点から不適当であることを指摘している点である。大弐三位の和歌は物語成立後に詠まれた和歌であるので物語を解釈する際の証歌にはならない、と述べている。引歌として提示する和歌に対しての明確な使用基準、つまり提示する和歌は『源氏物語』成立以前、もしくは成立とほぼ同時期の和歌のみを対象とする、という基準が設定されていたことが窺える。内容的に引歌として踏まえるに値する和歌であったとしても、詠歌時期の点から不適当とされるのである。

注釈において作品の成立時期を考慮することは当然のことであり、『花鳥余情』においても注釈に使用される他の文学作品は『源氏物語』以前に成立したものである。しかし、和歌を提示する注記の中には、『源氏物語』成立以後に詠まれた和歌を提示しているものがある。以下に、一例を示す。

『花鳥余情』椎本巻

うらめしといふ人もありけるさとの名の
うらめしといふさとの名は古今の歌に世をうち山身を宇治はしなとよめる心をとりていへる也　この源氏の詞をとりてよめる歌　元久元年七月宇治御幸の時夜恋の題にて定家卿

まろ人の山ちの月もとをけれは里の名つらきかたし

きの床
又名所の歌に家隆卿
初霜のなれもおきぬてさゆる夜に里のなうらみうつ衣かな

この注記には、二重傍線で示したように定家と家隆の詠作が示されており、これらは、傍線部「この源氏の詞をとりてよめる歌」とあるように、『源氏物語』を踏まえた和歌である。引歌提示を目的とする注記は『源氏物語』が踏まえた和歌を示すのに対し、ここでは『源氏物語』を踏まえた和歌を示している。同じく和歌を提示する様式を取りながらも、注釈の対象が正反対である。これらは物語を読み解くための引歌を示す注記ではなかろう。

後人詠提示と関わる『花鳥余情』の特徴の一つとして、注釈に歌道・歌学の影響が見られる点が挙げられる。これは先行研究によって指摘されている。

『源氏物語』は早くから歌道の面で重んじられて来たが、その趣意はこの書にもよく生かされている。すなわち奥書に「源氏物語之詞、篇々通示教之命脈、句々貫和歌之骨髄」とあって、教訓的な効用とともに歌道上の価値を認めており、注釈の中でも歌道に結び付けて言及しているところが少なくない。[2]

『花鳥余情』が歌道・歌学の成果によって注釈を施したことを踏まえると、後人詠を示すことも歌道・歌学の面からの注釈であったことが推測される。後人の和歌は、簡単に述べるならば、実際の詠歌の場で『源氏物語』の語彙を使用するために、作例として示されたと考えられる。「定家卿」「家隆卿」として人名を示すのは、示された和歌に権威や信頼性を持たせるためであろう。ただし、具体的な歌道・歌学の影響関係や、これらの後人詠がどのような過程によって注釈に取り入れられたかは不明である。

また、後人詠を示す注記は、『花鳥余情』だけでなく、『伊勢物語』の注釈書である『伊勢物語愚見抄』にも確認出来る。[3]

そこで本論考では、兼良の物語への注釈態度を踏まえながら、歌学・歌道がどのように物語注釈に流入していったのか、その一端を明らかにする。

二、『花鳥余情』『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記

後人詠が示される注記について、該当するものを【資料編】として論考の後に示した。これをもとに、まずはそれぞれの用例の傾向を確認する。

『花鳥余情』では、13注記15首の後人詠が確認出来る。『花鳥余情』には240注記282首の和歌提示注記が存在するので、13注記15首という数量は全体の5％強でしかない。『花鳥余情』に示される和歌のほとんどは物語を解釈する為のいわゆる引歌を示すものであり、後人詠を示すものは希有な例外である。[4]

後人詠の詠者とその歌数は、定家7首、俊頼2首、俊成2

首、家隆2首、慈円1首となっており、定家詠が用例の半数を占める。また、【2】【4】【5】【6】【7】【10】【11】の7注記には、「この源氏の詞をとりてよめる歌」「こゝの詞をとりてよめるにや」といった注釈が付されており、後人が当該の場面や詞を踏まえたことを指摘する。これらは、和歌における《源氏物語取り》の手法を指摘する注記である。残りの注記は、直接『源氏物語』を踏まえたわけではないが、詠歌の実作例として後人詠を提示しており、実際に和歌を詠むことに重点を置いた注記であることが窺える。また、これら後人詠の詠者が俊頼・俊成・定家・家隆・慈円と限定的であることも、詠歌の規範とするに足ることを示す意図が読み取れる。ただし、俊頼詠の2首には、「こゝの詞をとりてよめるにや」といった注釈は付されていない。用例数が少ないため推測となるが、同じ後人詠であっても定家詠を示す意図と俊頼詠を示す意図は別のものであった可能性がある。

一方『伊勢物語愚見抄』[5]には、後人詠が5注記7首確認出来る。『伊勢物語愚見抄』で示される詠者とその歌数は、俊成2首、定家2首、慈円1首、永実1首、崇徳院1首である。そして【15】で示した六十九段の注記を除き、傍線部で示したように、物語の詞を和歌に取ったという注釈が付される。『花鳥余情』が《源氏物語取り》を示したのと同様に、《伊勢物語取り》を指摘しているのである。『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記は、数こそ5注記と少ないものの、『花鳥余情』とほぼ同様の傾向にある。

これら『伊勢物語愚見抄』の例で注目すべきは、3注記4首（【14】【16】【18】）が再稿本の段階で増補されたものであるという点である。一例として、【14】の場合を示す。

『伊勢物語愚見抄』（初稿本）五十九段

住侘ぬ今は限と山里に身をかくすべき宿もとめてむ。

後撰集の第十五にあり。

住みわびぬ今はかぎりと山里に爪木こるべき宿もとめてん

とあり。業平の詠也。

『伊勢物語愚見抄』（再稿本）五十九段

六十、すみわひぬいまはかきりと山さとに身をかくすへきやともとめてん

『後撰集』の第十五に、世の中を思うして業平のよめる歌、

すみわひぬいまはかきりの山さとにつま木こるへきやともとめてん

同歌の第四句、両説ある也。いつれも和歌にはとりてよむへき也。俊成卿歌、

すみわひて身をかくすへき山さとにあまりくまなき夜はの月哉

いまはとてつま木こるへきやとの松千代をは君と猶いのるかな

両者を比較すると、初稿本の段階では単に『後撰集』業平の異伝歌を挙げていたのに対し、再稿本では『後撰集』の詞書も示され、更に異伝歌の後に俊成歌の二首が付け加えられる。再稿本は、第四句が「身をかくすへき」と「つま木こるへき」とで揺れていることに関して、傍線部でどちらの歌句も詠歌に用いると述べた上で、それを俊成の和歌二首によって証明しているのである。ここで増補された二首は、実際に詠まれたことを示す用例歌である。再稿本での増補は、初稿本の注記を更に深めたものではあるが、物語の内容に直接関わる注釈ではない。

この増補が行われた時期は、初稿本成立から再稿本成立の間、つまり長禄四（一四六〇）年から文明六（一四七四）年の間である。初稿本の段階でも後人詠を示す注記が見られるため増補に限られた特徴とは言えないが、晩年の兼良の注釈態度を窺い知ることが出来よう。

以上、『花鳥余情』と『伊勢物語愚見抄』に見える後人詠注記の特徴を確認した。これらには、兼良の歌学書である『歌林良材集』との接点を窺える注記が含まれている。詳しくは後述するが、『花鳥余情』の15首中8首、『伊勢物語愚見抄』の7首中6首が、『歌林良材集』にも存在している。これは後人詠注記の大きな特徴の一つである。第三節でこの『歌林良材集』との関係について詳しく検証を加える。

問題を『花鳥余情』の後人詠に戻そう。『花鳥余情』の注釈姿勢を考える際、『河海抄』との関係を念頭に置く必要があるが、その『河海抄』の料簡には、和歌における《源氏物語取り》の手法について述べた箇所がある。[7]

『河海抄』料簡

一中古の先達の中に此物語の心をは哥には詠むへからす詞をとるはくるしからすといふ一義あれとも心をとりたる哥撰集の中にあまたみゆ続拾遺集権中納言俊忠

なかめつる心のやみもはるはかりかつらのさとにすめる月影

とよめるは彼松風巻におもひむせひつる心のやみもはるゝやうなりといへる心ときこえたり同集に典侍親子朝臣

あかさりし袖かとまかふ梅かゝに思なくさむあか月の空

浮舟の君小野にてこと花よりもこれに心よせのあるはあかさりしにほひのしみにけるにやといへる心也　前太政大臣

しら露（新古今集）のなさけをきけることのはやほの〳〵みえしゆふかほの花　太上天皇（後嵯峨院）

袖（続古今集）のかや猶のこるらんたち花のこしまによせしよはの浮舟　小侍従

うちわたすをちかた人にことゝひて名をしりそめし夕顔の花　光俊朝臣

この比はゆくせの水をせきいれて木かけすゝしき中河のやと　鷹司院帥

あかしかた浪のをとにやかよふらん浦よりをちのをかの松風

是等はみな心をとれる哥也詞をとる哥新古今にむしのねもなかき夜あかぬふるさとに見し夢にやかてまきれぬわか身こそありあけの月のゆくゑをなかめてそ続古今になれよなにとてなくこゑのなといへるたくひ勝計すへからすおほかた狭衣物語のたつぬへき草の原の哥をも猶本哥に用たる哥近代集にあまたあるにやひとへに心をとるへからすとさためかたくや且は俊成卿六百番判詞にも源氏みさる哥よみは遺恨の事也云々又正治奏聞状にものりなかもきよすけも源氏をみ候はすともにうたてき事に候也と載られたり尤和語の奥逸なるものなり

傍線部に示したように、この料簡には「詞をとる」「心をとる」といった語が見られ、これは『花鳥余情』の後人詠注記に見られた「この源氏の詞をとりてよめる歌」「こゝの詞をとりてよめるにや」という注釈と通じるものである。しかし『河海抄』は『源氏物語』を踏まえた和歌を詠む際に、「詞」を取ることは当然ながら、「心をとる」ことも問題にはならない、ということを示すのみである。

『河海抄』ではこの他に、例外的に源親行の和歌を示す箇所がある程度で、注記の中に後人詠を示すことはない。『河海抄』は、『源氏物語』を解釈する際に必要なもののみを示したのであり、後人詠は物語注釈に必要ないと考えたことが窺える。そのため、『源氏物語』の外的事象（作者紫式部の生い立ち・准拠の手法・諸本等）を扱った料簡において、後人詠に関わる問題を簡単に記すに留まったのではなかろうか。『河海抄』は歌学書引用の手法を取るものの[8]、後人詠まで注記に取り入れることはなかったのである。

これに対して『花鳥余情』における歌学の利用はどうであったか。『花鳥余情』の歌学の利用については、武井和人氏が、

晩年の兼良は、定家の詠歌方法に強くひかれる所があつたと覚しい。例へば、『花鳥余情』の中で定家の名をあげるのは、管見による限り八例あるが、内七例が、定家の《源氏取り》の和歌を指摘するものである。（中略）『歌林良材集』に採られた和歌の内、『拾遺愚草』からの抄出歌が、他の私撰集を圧倒してゐたことも、兼良の定家歌崇拝を如実に物語つてゐよう[9]。

と、兼良の定家歌崇拝を指摘しておられる。武井氏は『花鳥余情』と『歌林良材集』との具体的な接点は示されていない

が、正鵠を射た指摘である。『河海抄』が歌語の解釈を歌学書によって示したのに対し、『花鳥余情』は具体的な詠歌方法を記したのであり、両者の歌学書の使用方法及び目的は異なる。また武井氏は、有職故実の側面から、「『花鳥余情』は、少なくとも40年間にわたる《兼良学》―例へば、『令』『江家次第』研究、装束学―の集成であつた」[10]と述べられているが、歌学の摂取という面においても同様であったと考えられよう。この他にも、伊井春樹氏は刈谷図書館村上文庫蔵『和歌秘書集』を、『花鳥余情』の成立背景に関連する歌学書として指摘されている[11]。

三、『歌林良材集』との関係

『花鳥余情』『伊勢物語愚見抄』に見られる後人詠の半数以上が、同じく兼良の歌学書である『歌林良材集』に見え、両者の強い結びつきが想定出来る。ここからは、『歌林良材集』を物語注釈にどの様に反映させていったのかを、具体的に検証していく[12]。

まず『歌林良材集』の「第二　取二本歌本説一體」から「取二用本歌物語意詞一事」の項目を取り挙げる。ここでは本歌・本説の後にそれを承けた後人詠を示す形で、順に万葉歌、『伊勢物語』九十六段、『源氏物語』若紫巻、同じく椎本巻、再び万葉歌二首を示す。ゴシックで示した後人詠は、以下のそれぞれの注記にも見える。

『歌林良材集』「第二　取二本歌本説一體」

取二用本歌物語意詞一事

（萬三）くるしくもふりくる雨か三輪か崎さの〻渡にいへも
あらなくに　奥麿

新古　駒とめて袖うちはらふかげもなし（家もなき心也）さの〻わたり
の雪の夕暮　定家

伊勢物語、海士のさかてをうつ事

おのれのみ海士のさかてをうつたへに木葉ふり
しく跡だにもなし　定家

源氏若紫巻云、くらぶの山にやどりもとらまほしく
おぼえ給へど、あやにくなるみじか夜にて

兼厳暁恋　**こよひだにくらぶの山に宿もがな暁しらぬ夢や**
覚ぬと　定家

やどりせぬくらぶの山を恨つ〻はかなの春の夢
の枕や　同

同しゐがもとの巻云、うらめしといふ人もありける（世をうち山といふ心也）
里の名の、なべてむつまじうおぼさる〻ゆゑも

待人の山路の月もとほければ里の名つらきかた
しきの袖　同

はつ霜のなれもおきゐてさゆる夜に里の名うら
みうつ衣哉　家隆

萬　君があたり見つ〻ををらむ伊駒山雲なかくしそ雨
はふるとも

いこま山いさむる嶺にゐる雲のうきて思のはるゝまもなし　定家

萬葉集第五、梧桐日本琴一面對馬結石山孫枝此琴夢化二娘子一云々

いかにあらむ日の時にかもこゑしらん人のひざのうへわが枕せん

六百番寄琴恋　むかしきく君が手なれの琴ならば夢にしられで音をもたてまし　定家

『伊勢物語愚見抄』（再稿本）九十六段（資料【16】）

かのおとこ、あまのさかてをうちてなん、のろひをるなる。

あまのさかてうつとは、人を呪詛する事をいふ。地神第四代彦火火出見尊と申神のこのかみ、火闌降命と申おはしましけり。この二の神、さちかへをし給ひし時、このかみのつりはりをうしなひ給ひしを、それ返したへとなをさりならすせめたまひしかは、もしやとうみのほとりをたつねありき給ひし時、しほつゝの翁といふ神のはかり事により、海の宮へ入給て、やうくとつりはりをたつねいたして、あにのみことに返し給ふ時、うみの神のおしへによりて、さまくのろくしき事ともをいひつゝけて、うしろてにてはりをなけあたへ給ひし事あり。くはしく『日本紀』の第二の巻にみえたり。かゝる事のをこりよりはしまりて、人をのろふとては、手をうしろへやりてたゝく事ありとかや。それを、あまのさかてうつ、とはいふなり。定家卿、こゝのこと葉をとりてよめるうた、

をのれのみあまのさかてをうつたへにふりしく木の葉あとたにもなし

『花鳥余情』若紫巻（資料【2】）

くらふ山にやとりもとらまほしくおほえ給へとあやにくなるみしか夜にて

六帖二くらふ山くらしと名にはたてれともいもかりといはゝよるもこえなん

今案此歌いたくかなはねともくらふ山をくらきかたによめる歌なれはこゝの詞にすこしき便あるにや心は夜かはやくあくれはしはらくくらき所にやとりはとらまほしきと也　京極中納言こゝの詞をとりてよめる歌

兼厭暁恋今夜たにくらふの山に宿もかな暁しらぬ夢やさめぬと

やとりせぬくらふの山を恨つゝはかなの春の夢の枕や

『花鳥余情』椎本巻（資料【11】）

うらめしといふ人もありけるさとの名の

うらめしといふさとの名は古今の歌に世をうち山身を宇治はしなとよめる心をとりていへる也　この源

氏の詞をとりてよめる歌　元久元年七月宇治御幸の時夜恋の題にて定家卿

まろ人の山ちの月もとをけれは里の名つらきかたしきの床

又名所の歌に家隆卿

初霜のなれもおきゐてさゆる夜に里のなうらみうつ衣かな

『伊勢物語愚見抄』九十六段の注記では、末尾に引用が認められる。「定家卿、こゝのこと葉をとりてよめるうた」の注記と、「をのれのみあまのさかてを……」の和歌は、再稿本段階での増補である。先にも触れたが、傍線部「こゝのこと葉をとりてよめるうた」の注記は、この定家詠が当該箇所に基づいて詠まれたことを指摘するもので、物語解釈の面では増補の必要性は低い。

『花鳥余情』若紫巻、椎本巻の注記も、傍線部「詞をとりてよめる歌」という注釈を伴いながら、定家・家隆の詠を示す。『歌林良材集』において「源氏若紫巻云」「同しゐがもとの巻云」と示され、それを受け継ぐように、『花鳥余情』も若紫巻と椎本巻において後人詠を組み入れている。またこれら『花鳥余情』に見える、詠者、歌題、和歌の提示順は、『歌林良材集』と同様である。例えば「今夜だに……」の定家詠に付された「兼厭暁恋」の歌題が、『歌林良材集』『花鳥余情』の両者に共通して見えるといった具合である。更に『花鳥余情』の見出し本文についても、『歌林良材集』が示す『源氏物語』本文をそのまま見出し本文に使用したかのようである。これらを踏まえると、『歌林良材集』の注記は、ほぼそのまま『花鳥余情』の注記に取り入れられたと考えられる。もちろん『花鳥余情』が更に情報を加えたことは言うまでもない。

『歌林良材集』の当該箇所で注目すべき箇所は、もう一点ある。それは『万葉集』三〇三二番歌「君があたり見つゝををらむ伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも」を本歌とする定家詠が、『花鳥余情』に確認出来る点である。

『花鳥余情』花宴巻（資料【5】）

ほかのちりなんとやをしへられたりけん

古今歌にほかのちりなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれは歌のこと葉になき事をも心をとりてかくかける也　定家卿の歌はおほくはこの物語よりいてたりとみえ侍り

いこまやまいさむるみねにゐる雲のうきて思ひのきゆる日もなし

とよめるは本歌の雲なかくしそといへるは雲をいさめたる心なれはやかていさむるみねと心をとりてよみ侍る也　こゝの詞に相にたるやうなれはよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也　大方源氏なとを一見するは歌なとによまむ為也　読んにとりては本歌本説を用へきほとをしらすしてはいかゝと思ひ給へ

侍れはいときなき人のためしるし付侍る也

この『花鳥余情』花宴巻に引用された「いこまやま……」の定家詠が万葉歌三〇三二番歌を本歌としていることは、波線部の「本歌の雲なかくしそといへるは」の部分から推定出来、やはり『歌林良材集』からの引用と見てよいだろう。当該箇所では万葉歌を本歌取りする例として、『歌林良材集』から定家詠が引用され、歌学の成果が物語注記に再利用・転用された形になる。

しかしこの和歌は、物語の解釈に直接結びつかないものであるのは勿論のこと、傍線部「おほくはこの物語よりいてたりとみえ侍り」の部分とも関わりがない。むしろ傍線部の直前「歌のこと葉になき事をも心をとりてかくかける也」の実作例として定家詠を示したと考えるべきである。この理由について兼良は、点線部において、詠歌作法の観点からの注釈であることを述べている。『源氏物語』とは関係なく、詠歌の際に本歌を押さえることの重要性を説いているのである。また「いときなき人のため」と初学者を対象としていることからは、和歌詠作の作法を物語の注釈を通して学ばせるという意図が読み取れる。『花鳥余情』は『源氏物語』の解釈だけを目的とした注釈書ではないことが窺える。

『歌林良材集』と物語注釈との関係は、他の箇所からも見える。次に示す例から、引用の態度を看取出来る。『歌林良材集』の「第二　取二本歌本説一體」の中から、物語を本歌として示すものを抜き出した。

『歌林良材集』「第二　取二本歌本説一體」より

取二本歌二句或三句一引二違意一體

伊勢物語　思あらば葎のやとにねもしなむひしき物には袖をしつゝも

（新古）　たえてやは思ひありともいかゞせむ葎の宿の秋の夕暮　雅経

本歌第三四句を第一二句になして讀る體

源氏　世にしらぬ心ちこそすれ在明の月の行方を空にまがへて

（新古）　**あり明の月の行方をながめてぞ野守の鐘は聞べかりける**　慈鎮

本歌第一二の句を第三四の句になして讀る體

伊勢物語　かち人のわたれどぬれぬえにしあれば又あふさかの関はこえなん

新古　逢坂の関ふみならすかち人のわたれどぬれぬ花の白波　後京

取二本歌一句一體

源氏　鈴蟲のこゑのかぎりをつくしても長夜あかずふる涙かな

蟲の音も長夜あかぬふる郷に猶思ひそふ松風ぞ吹　家隆

源氏　見ても又あふ夜まれなる夢の中にやがてまぎるゝ我

身とも哉
　みし夢にやがてまぎれぬ我身こそとはるゝけふは先かなしけれ　後京
本歌二句三句不レ替レ置取體
源氏　うつせみの羽におく露の木がくれて忍びくにぬるゝ袖哉
新古　鳴蝉の羽におく露に秋かけて木陰すゞしき夕暮のこゑ　後京
本歌の意に贈答する體
源氏　あげ巻にながき契りを結びこめおなじ所によりもあはなん
　ながくしもむすばざりける契りゆゑ何あげ巻のよりあひにけん　定家

この中で、物語注記に転用したと考えられるものをゴシックで示した。二つ目の慈円の和歌と、最後の定家の和歌である。それぞれに対応する注記を以下に示す。

『**花鳥余情**』**花宴巻**（資料【4】）
よにしらぬ心ちこそすれ在明の月の行ゑを空にまかへて
吉水僧正歌
あり明の月のゆくゑをなかめてそ野寺のかねはきくへかりける
此歌をとりてよみ給へる也　源氏をは詞をも歌をもとりてよむへき也　俊成卿も源氏みさらん歌よみは無念の事といへり　又花のえんの巻はことにすくれて艶なる巻とも申給へり

『**花鳥余情**』**総角巻**（資料【12】）
あけまきになかき契をむすひこめおなし心によりもあはなん
催馬楽呂歌
あけまきやひろはかりやさかりてねたれともまろひあひにけりかよりあひにけり
今案ひろはかりは八尺はかり也　さかりてはいとのさかりたるを人さかりてねたるにそへたる也　定家
卿歌にも
なかくしもむすはさりける契ゆへなにあけまきのよりあひにけん

当該箇所からは、『歌林良材集』に存在する後人詠が、必ずしも全て物語注記に使用された訳ではないことが指摘出来る。『歌林良材集』には、雅経、良経、家隆の詠も見られるが、これらは『花鳥余情』には引用されていない。特に、良経の物語取りの詠は『歌林良材集』に3首も挙げられているものの、『花鳥余情』では一切使用されていない。逆に、『歌林良材集』が指摘する物語取りの定家詠は、すべてを引用している。また家隆詠に関しても、先に示した椎本巻の注記（資料【11】）では引用されていたが、ここで示した『歌林良材集』の指摘する鈴虫巻に基づく詠は引用されていない。

これらの現象は、その詠者が誰であるかも重要な要素であったことを意味する。先の武井氏の指摘にあったように、定家詠が最も重要視され、家隆、俊成、慈円らの詠は定家詠に準ずる存在であったことが窺える。この点から、物語注記で後人詠をその詠者名と共に示した意図が読み取れよう。物語取りを行った後人詠ならば誰の和歌でも良いという訳ではなく、権威ある定家やそれに準ずる人物らの詠歌を提示することで、注釈の信頼性を高めようとしたのではないだろうか。また、物語取りの指摘が和歌詠作における作法の一端を教示するためであったことを考え合わせると、詠歌における目標をはっきりと指し示すという意図も見えてこよう。

以上確認した後人詠注記の6例は、『歌林良材集』「第二 取二本歌本説一體」からの引用であった。具体的な本歌・本説の箇所を示す当該箇所は、物語注釈にも反映し易い部分であったかと思われる。ただし、『歌林良材集』からの引用と思しき箇所は他にも存在するため、以下ではそれらの例を確認する。

まずは、「第一　出レ詠歌諸體」より「有二二説一歌共為二本歌一用之事」の項目を取り挙げる。

『歌林良材集』「第一　出レ詠歌諸體」

有二二説一歌共為二本歌一用之事

古　暁の鳴のはねがき百はがき君が来ぬ夜は我ぞかずかく　（讀人不知）

あかつきのしぢのはしがき百夜かき君がこぬよはわれぞ數かく

千載　思ひきやしぢのはしがきかきつめて百夜もおなじまろねせんとは　俊成

千五百番　とにかくにうき數かくや我（はイ）なれや鳴の羽がきしぢのはしがき　慈鎮

すみわびぬいまはかぎりと山里に妻木こるべき宿もとめてん　（業平）

住侘ぬ今はかぎりと山ざとに身をかくすべきやどもとめてん　（同）

千載　住侘て身をかくすべき山里にあまりくまなき夜はの月かな　俊成

今はとて妻木こるべき宿の松千代をば君と猶祈る哉　同

後　あふ事はとほ山鳥（ずり）のかり衣きてはかひなき音のみぞなく　元良御子

定家卿僻案抄云、きぬなどのすりには遠山をする物なればよめるにこそ。一本には、とほ山鳥と有。音をのみなくといふにことよれるにや。すりのとほ山いはれあるうへに、（行成卿）大納言の本に、とほ山ずりとあり。

萬十一　波間よりみゆる小嶋の濱ひさし久しく成ぬ君にあはずて

熊野御幸
庭上冬菊
霜おかぬ南の海のはまひさし久しく残る秋のしら菊　定家

右、濱ひさしにて、庭上のこゝろはあるなり。

ここに示した例は「有二説一歌共為二本歌一用之事」とあるように、本歌に異伝歌あるいは異本歌が存在し、その両説がそれぞれ後世の和歌に詠まれたものを示したものである。二つ目の「すみわびぬ」の和歌、四つ目の「はまひさし」に関するものが、『伊勢物語愚見抄』においても確認出来る。

『伊勢物語愚見抄』（再稿本）五十九段（資料【14】）

六十、すみわひぬいまはかきりと山さとに身をかくすへきやともとめてん

『後撰集』の第十五に、世の中を思うして業平のよめる歌、

すみわひぬいまはかきりの山さとにつま木こるへきやともとめてん

同歌の第四句、両説ある也。いつれも和歌にはとりてよむへき也。俊成卿歌、

すみわひて身をかくすへき山さとにあまりくまなき夜はの月哉

いまはとてつま木こるへきやとの松千代をは君と猶いのるかな

『伊勢物語愚見抄』（再稿本）百十六段（資料【17】）

百十七、浪間よりみゆるこしまのはまひさし久しくなりぬ君にあひみて

はまひさしの事、『知顕集』なとにさまく申侍れと、みないたつら事とそ覚え侍る。はまひさしは、たゝ浜にある家をいふへし。とまひさし、いたひさしなといふかことし。定家卿、熊野御幸の御ともにまいりて、新宮三首の中、庭上冬菊といへる題にてよめる歌、此物かたりを本歌にとれり。

霜をかぬ南の海のはまひさし久しくのこる秋のしらきく

此歌、はまの家の心ならねは、題の庭の文字落題になる也。又、物語のはまひさしを、浜ひさきとかきたる本あり。よりきたれるによりて、ともに本歌にはとるへき也。君にあひみては、あひみぬといふ詞也。

この2注記は、傍線部「いつれも和歌にはとりてよむへき也」「此物かたりを本歌にとれり」といった文言を伴い、実作例として後人詠を示す典型的な引用形態をとる。先に触れたように【14】の後人詠注記は再稿本段階での増補であるが、【17】の後人詠注記については初稿本から確認出来る。つまり初稿本編集時に、既に『歌林良材集』のような歌学の成果が物語注釈に反映されていたことが推察されるのである。[14] そして増補の際の歌学流入とを重ね合わせると、兼良の物語注釈における歌学の反映は、度重なるものであったと考えられ

る。つまり、歌学やその他の学問の成果は、複数の段階で物語注釈に転用され、流入していったことが見て取れよう。[15]

この他にも、「第三　虚字言葉」より、一例の影響関係が確認出来た。

『歌林良材集』「第三　虚字言葉」

われて、わりなくての心也。一は別て也。

古　よひの間に出て入ぬるみか月のわれて物思ふ比にも有哉　（讀人不知）

たかねより出くる水の岩だゝみわれてぞ思ふ妹にあはぬよは

詞花　瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ　新院

金　三か月のおぼろけならぬ恋しさにわれてぞ出る雲のうへより　永實

『伊勢物語愚見抄』（再稿本）六十九段（資料【16】）

われてあはんといふ。

われては、わりなくしてあはんといふ詞也。『金葉集』、永実歌、

三日月のおほろけならぬ恋しさにわれてそいつる雲のうへより

この歌のわれては、わりなき心にかなへり。又『詞花集』、新院御製

瀬をはやみ岩にせかるゝ谷水のわれても末にあはんとぞ思ふ

これは、わかれてもの心也。

当該の注記は、「われて」の意味を、実作例を示しながら説明する。【16】の後人詠注記は初稿本の段階から確認出来、早い段階で『伊勢物語愚見抄』に流入したものと思われる。「われて」の用法に二通りあることを示している点や、提示する歌集名や詠者が一致している点を考えると、『歌林良材集』からの引用であると考えて問題ないであろう。『伊勢物語愚見抄』において、永実詠を崇徳院詠よりも前に示すのは、勅撰集を成立順に提示する意図であろうか。

この注記は、「詞をとりてよめる歌」といった文言を伴っておらず、内容も歌語を具体的な用例歌によって説明するものであり、これまで確認してきたような後人詠注記とは異なる。また詠者の崇徳院と永実とは、当該箇所にしか見られない。後人詠を示す場合でも、注釈の初期から存在したものと、増補の際に加えられたものでは、その注釈の特徴が異なるのである。物語注釈における歌学の利用は、用例歌から物語取りの実例へ、意味説明から実践の手解きへ、その意図が変化していったと考えられる。

最後に、「第五　有二由緒一歌」より、もう一例を示す。

『歌林良材集』「第五　有二由緒一歌」

かさゝぎの行あひの間事、一説、かたそぎの行あひの間

夜やさむき衣やうすきかたそぎの行あひの間より霜やお

くらん

右、歌論義といふ書には、かたそぎとあり。奥義抄にはかさゝぎとあり。かたそぎといふは、神のほくらのつまに、刀のやうにてたてる木也。又は千木とも云也。この歌は、住吉の社の年月おほくつもりてあれたる所おほくありければ、そのゆゑをおほやけにしらせたてまつらんとて、みかどの御夢に見たる歌といへり。かさゝぎといふ説は、天河に鵲といふ鳥の羽をならべて橋になして、織女をわたすといふ事也。そのかさゝぎの行あひを、あやまりてかたそぎと書るといへり。ただし、七月七日こそ七夕の渡らむためにわたすべきに、冬など霜の事によまむ事は、いかゞと聞ゆれど、歌はさのみある事なり。たゞ空より霜のふるといはむとて、かさゝぎの行あひの間とはよめる也。かさゝぎの橋に霜をむすびてよめる歌どもあまた有。

かさゝぎのわたせる橋の霜のうへを夜半にふみ分ことさらにこそ　　忠岑

かさゝぎのちがふる橋の間どほにてへだつる中に霜やおくらん（六帖）　　曽丹

かさゝぎのわたすやいづこ夕霜の雲ゐにしろきみねの梯（橋ヲ霜）　　家隆

『花鳥余情』浮舟巻（資料【13】）

さむきすさきにたてるかさゝきのすかたも

かさゝきといふはまつは鵲のからす也　しかれともこの物語には鷺をかさゝきといへり　かさゝきのはしを絵なとにかくにはからすをもかき又しらさきをもかく也　家隆卿歌

かさゝきのわたすやいつこゆふしもの雲井に白き嶺のかけはし

この歌はかさゝきの色を白物にたとへられたり　所詮かよはして用へき事にこそ　わすれ草を萱草ともいひ又忍草の異名ともいふかことし

これは「かささぎ」の歌語について述べたもので、家隆の詠が一致する。この例も【16】同様、物語取りの実作という面だけでなく、「所詮かよはして用へき事」という歌語の用例歌としての要素が強く出ている。ただし『歌林良材集』で用いられている歌語説明の注釈が、当該箇所の『花鳥余情』にはほとんど反映されていないことからは、他の注釈等の成果が流入した可能性が残る。[16]

また、この「有二由緒一歌」の項目には、後人詠注記ではないものの、影響関係を確認出来る例が存在する。

『歌林良材集』「第五　有二由緒歌一」

宇治橋姫事、一、宇治玉姫

さ筵（古）に衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治の橋姫（又宇治玉姫）

右、宇治橋姫とは、姫大明神とて、宇治の橋の下に

おはする神也。其御所へ宇治橋の北におはする離宮と申神の、夜毎にかよひ給ふとて、暁ごとにおびたゞしく波のたつ音するとなむ、彼辺の土民は申ならはせり。此歌は離宮の御歌と申。又隆源阿闍梨と申者は、住吉大明神の宇治橋守の神に通給ふと申ゆゑに、此歌は住吉明神の御歌といへり。

千はやぶる宇治の橋守なれをしぞ哀とは思ふ年の経ぬれば（古）　（讀人不知）

右、此歌を古今集の一本に、宇治のはし姫と書る事あり、又橋姫の物語といふ物あり。それにこの二首の歌を書り。但、定家卿は彼の物語不レ可レ用之由、しるされ侍り。

烏羽玉の夕はかへる今夜さへわれをかへすな宇治の玉姫（六帖）　家持

『花鳥余情』橋姫巻

はし姫の心をくみてたかせさすさほのしつくに袖そぬれける

宇治はしひめは橋下の姫大明神と申神也　離宮の神この姫神にかよひ給ふといふ説あり　又一説住吉大明神の宇治の橋下にかよひ給ふといふ　さむしろに衣かたしきの歌は住吉明神の御歌といひつたへたり

むは玉のよむへもかへる今夜さへ我をかへすなうちのはし姫（六帖）（家持）

『河海抄』橋姫巻

はしひめの心をくみてたかせさすさほのしつくに袖そぬれける

橋姫は宇治橋の神也此故に万葉にもちはやふるうちと云り

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらんうちのはしひめ（古今）

宇治の橋姫といふ古物語にあり

宇治橋　孝徳天皇大化二年沙門道登始造之

これらは宇治の橋姫についての注記である。参考として『河海抄』も示したが、武井氏が「河海抄の反措定として」[17]と述べられるように、『河海抄』の注記を補填するかのごとく、『花鳥余情』は注記を施す。語彙の一致を傍線で示したが、この『花鳥余情』の注記は『歌林良材集』をもとに作成したかと思われる。『花鳥余情』に示された「一説」が『歌林良材集』によって「隆源阿闍梨」説であると判明するように、『歌林良材集』から『花鳥余情』へと説が再利用・転用されていることが分かる。ただ『歌林良材集』の注釈をそのまま引用しているのではなく、『花鳥余情』執筆にあたって再構築されている。その際、用例歌もしくは関連歌として家持の古今六帖歌をしたのであろう。

以上が『歌林良材集』との関係が窺えるものであったが、最後に『歌林良材集』との関係が想定されないものに関して、

言及しておく。

物語注記に見える後人詠が、『歌林良材集』には見えなかったものとして、【1】【3】【6】【7】【8】【9】【10】【18】がある。これらは、用例歌・証歌として提示した可能性がある。また俊成の詠は、後人詠の注記に良く見える「詞をとりてよめる歌」という文言がありながらも、『歌林良材集』とは全く関係性が認められない[18]。『歌林良材集』以外の歌学書、注釈書からの流入過程については、今後更なる考証を重ねていきたい。

四、まとめ

以上、兼良の物語注釈と『歌林良材集』との関連性を指摘した。『花鳥余情』『伊勢物語愚見抄』所載の後人詠は、その大半が『歌林良材集』と一致し、兼良の歌学の成果が物語注釈に流入した形跡であると判断出来よう。

『歌林良材集』は、兼良の早い段階での著作である。一方物語の注釈書は、『伊勢物語愚見抄』初稿本が長禄四年（一四六〇）年、再稿本は文明六（一四七四）年に成立しており、その間の文明四（一四七二）年に『花鳥余情』初稿本が成立している。

『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記は、再稿本の段階で加わったものである。また源氏注においても、後人詠注記は、兼良壮年期の注釈である『源氏和秘抄』には存在せず、『花鳥余情』から登場する。付け加えると、『花鳥余情』においては、再稿本以降に後人詠注記が増補された形跡はないため、すべてが初稿本の段階で注釈に取り入れられたものと考えられる。これらを考え合わせると、後人詠注記が物語注釈に流入した時期は、文明年間初期と想定出来るのではないだろうか。兼良壮年期の著作である『歌林良材集』が、晩年期に至って『花鳥余情』や『伊勢物語愚見抄』再稿本に再利用・転用されたと言えよう。

これら後人詠は、兼良の歌学と物語注釈との形成や展開に関わるだけでなく、兼良自身の和歌や連歌の実作状況とも結びつく問題を持つ。理論と実践の連動性について検証すべき点が残っているが、この点は別稿に譲りたい。

注

（1）今回使用する『花鳥余情』の本文は、再稿本系統にあたる中野幸一編『花鳥余情　源氏和秘抄　源氏物語不審条々　源語秘訣　口伝抄』（源氏物語古註釈叢刊第二巻、武蔵野書院、一九七八）により、尊経閣文庫蔵本で確認した。初稿本系統の松永本及び、献上本系統の龍門文庫本とも比校したが、管見の限り大きな異同はなかった。また論考内に引用する注記において、後人詠の指摘部分をゴシックで示した。

（2）中野幸一「解題」（中野幸一編『花鳥余情　源氏和秘抄　源氏物語不審条々　源語秘訣　口伝抄』源氏物語古註釈叢刊第二巻、武蔵野書院、一九七八）。

（3）『花鳥余情』と『伊勢物語愚見抄』との関係については、堀内秀晃「『伊勢物語愚見抄』と兼良の源氏学」（寺本直彦編『『源氏物語』とその受容』、右文書院、一九八二）に詳しい。氏は、「『愚見抄』は、兼良の源氏学の応用として、また『花鳥余情』をまとめる道程の一つとして、一定の役割を果たしてきた」と述べられる。

（4）稿者は、第30回中古文学会関西部会例会（於神戸女学院大学、二〇一一・一一・二六）において、「『花鳥余情』の引歌注記―兼良の文脈理解と施注方法―」と題する口頭発表を行った。『花鳥余情』における和歌提示注記の特徴は、大凡以下の六点が挙げられる。

①先行諸注と比較して、極端に引歌の指摘が少ない。また巻によって指摘される引歌の分量にかなりの偏りがある。

②先行諸注で指摘されていた引歌は、基本的に提示しない。

③先行諸注で指摘されていない引歌（『花鳥余情』によって初めて注釈に登場する引歌）を提示する。

④用例歌としての側面を保持するものもある。

⑤引歌提示の後に「今案」を付すものが67注記あり、これは和歌提示注記の約28％を占める。『花鳥余情』全体の「今案」は181注記であるから、約37％が和歌提示の注記に付されたことになる。

⑥『源氏物語』を本説・本歌とする後人詠を示す場合があり、

これらは物語の解釈に直接反映されない。

（5）『伊勢物語愚見抄』は、初稿本が長禄四（一四六〇）年の成立、再稿本が文明六（一四七四）年の成立である。なお本文であるが、初稿本は田中宗作『伊勢物語研究史の研究』（桜楓社、一九六五）、再稿本は片桐洋一・鈴木隆司編『伊勢物語愚見抄』（片桐洋一・山本登郎編『伊勢物語古注釈大成　第三巻』、笠間書院、二〇〇八）によった。

（6）武井和人「花鳥余情」（『一条兼良の書誌的研究　増補版』、おうふう、二〇〇〇）。氏は、『花鳥余情』と『河海抄』の関係について、

もはや常識に属することゆゑ改めてことあげされてゐないだけなのかもしれないが、『花鳥余情』は『河海抄』の反措定として著されたフシが読み取れる。換言するなら、『河海抄』を横に置き、逐一比較しながら読み進めなければ、注の真意（深意）が解読できないカラクリになつてゐると思はれるのだ。

と述べられている。

（7）『河海抄』の本文は、玉上琢彌編、山本利達・石田穣二校訂『紫明抄　河海抄』（角川書店、一九六八）によった。

（8）拙稿「『河海抄』における歌学書引用の実態と方法―顕昭の歌学を中心に―」（『詞林』五〇号、大阪大学古代中世文学研究会、二〇一一・一〇）。

（9）武井和人「柿本傭材集」（『一条兼良の書誌的研究　増補版』、おうふう、二〇〇〇）。

（10）（6）に同じ。

（11）伊井春樹「兼良の源氏学の形成―二条家の秘説から『花鳥余情』へ―」（『源氏物語注釈史の研究　室町前期』、桜楓社、一九八〇）。なお伊井氏の指摘を承けたものに、堤康夫「二条家秘説の伝流について」（『源氏物語注釈史論考』、新典社、一九九九）、岩坪健「二条家源氏学の成立と展開―二条家本流から末流へ―」（『源氏物語古注釈の研究』、和泉書院、一九九九）がある。

(12)『歌林良材集』の本文は、久曽神昇編『日本歌学大系　別巻七』（風間書房、一九八六）によった。

(13)『歌林良材集』が指摘する伊勢物語取りの後人詠も、すべてが『伊勢物語愚見抄』に反映されている訳ではない。

(14) この『歌林良材集』「有二説一歌共為二本歌一用之事」の注記は、『柿本傭材集』にも同様の注記が確認出来る。参考として『柿本傭材集』の該当箇所を以下に示した。

『柿本傭材集』「有二説哥事」

暁のしきのはねかき百羽かき君かこぬ夜は我そ数かく
　暁のしちのはしかき百夜かき君かこぬよはわれそ数かく
思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜も同し丸ねせんとは
　とにかくにうき数かくや我ならん鳴の羽かき榻のはしかき
　右しちのはしかき鳴のはねかきいつれも本歌に用へし
住わひぬ今はかきりの山里に身をかくすへき宿求めてん
今はとて妻木こるへき宿の松千世をは君と猶祈る哉
住侘て身をかくすへき山里にあまりくまなきよはの月哉
　右身隠すへき爪木こるへき共に用へし
逢事は遠山鳥のかり衣きてはかひなきねをのみそ鳴
　右遠山すり遠山鳥いつれも用へし定家卿はすりを猶可用之云々とを山とりはねをのみそなくに事よれるにや
波間よりみゆるこしまの浜庇久しく成ぬ君に逢見て
　右ひさしひさきよりきたるにしたかひ皆本哥に用へし此はまひさしの事さまくに申侍りみな徒事とそ覚え侍るはまひさしはたゝ浜にあるをいふへしとまひさし板ひさしなといふかことし定家卿熊野御幸の御供にまいりて新宮三首の中に庭上冬菊といへる題にて　霜をかぬ南のうみの浜ひさし久しくのこる秋の白菊　此哥はまの家の心ならねは題の庭の文字落題になる也所詮定家卿哥をもてひさしに治定し侍るへき者也哥道には定家家隆の説を聞侍らは（京大本・久松本「用侍らすは」）傍若無人といつへしとなん

『歌林良材集』『柿本傭材集』ともほぼ同様の注記であるが、『柿本傭材集』「波間より……」の和歌に付された注記中の「定家卿熊野御幸の御供にまいりて新宮三首の中に庭上冬菊といへる題にて」「此哥はまの家の心ならねは題の庭の文字落題になる也」という部分は、『歌林良材集』には見えず『伊勢物語愚見抄』とのみ一致する。この点から、『歌林良材集』の他に、『柿本傭材集』に結実した兼良の歌学も物語注記に影響を与えたことが知られ、物語注記への歌学の流入は複数の経路を持っていたことが分かる。また、『柿本傭材集』で注目すべきは、最後の部分、傍線と二重傍線を付した部分である。傍線部では、定家の歌をもって歌意を治定したことを述べており、二重傍線部「哥道には定家家隆の説を聞侍らは傍若無人といつへしとなん」と、定家と家隆の名を出し、歌道における彼らの説の重要性を説いている。この部分に見える、歌人としての定家や家隆を重視している兼良の態度は、そのまま物語注釈の根底にも流れていると判断出来よう。

(15) 稲賀敬二「源氏物語提要と諸注釈書」（『源氏物語の研究―成立と伝流―増補版』、笠間書院、一九八三）。

(16) 一例として『連珠合璧集』を示す。

『連珠合璧集』

かさゝきとアラハ。
　まつはからす也。鷺をもかさゝきといふ。かよはし用る也。

嶺飛越る。橋。木をめくる。寒きすさき。

ゴシックで示した部分が『花鳥余情』の注記と一致する。後人詠は示されていないものの、語彙は一致する。後人詠は『歌林良材集』、語彙説明は『連珠合璧集』といった取り合わせのような形態となっている。これは兼良の複合的な知識によって注釈が施されたと見るべきであろう。

（17）（6）に同じ。

（18）この他にも、『愚問賢注』との関係が指摘出来る。

『愚問賢注』

一、本歌をとる事、詩の心をもよめり。又漢家の本文勿論歟。源氏狭衣の詞、又子細なきをや。六百番判詞に、俊成卿の、源氏見ざらむ歌よみは口惜事と申されき。しからば源氏の詞など幽玄ならんをば、本歌にはとるべきをや。続古今に光俊朝臣、中河の心をよめるうた入りたり。今も本歌にはとるべきにや。

本説、本文、詩の心、物語の心、さのみ不レ可レ詠之由申して侍れども、つねに見え侍るにや。よもぎふの本のこころ、さごろもの草の原、目なれて侍る歟。源氏は歌よりは詞をとるなど申して侍る。須磨にあかつきかけて月いづる比なればといへるを取りて、**春の色はかすむばかりの山のはにあかつきかけて月いづるころ**、宇治に御馬にめすほど、ひきかへす心ちしてあさましといへるを、面影のひかふるかたにかへり見る都の山は月ほそくしてと侍る、艶におもしろく侍るにや。ともに京極入道中納言歌也。

『花鳥余情』須磨巻（資料【7】）

あかつきかけて月いつる比なれは

定家卿の此詞をとりてよみ侍る歌　内大臣家の百首

春はたゝ霞ばかりの山のはに暁かけて月いつるころ

ここでは須磨巻を踏まえた定家の物語取りの例が示されている。初句に「春の色は」「春はたゝ」の異同はあるものの、傍線部での一致が確認出来る。複数の歌学書、もしくは兼良の中で統合されていった記憶の集合体から、物語注釈へと転用されていったと考えられよう。

【資料編】

Ⅰ『花鳥余情』の後人詠注記

【1】『花鳥余情』帚木巻

うへはつれなくみさほつくりて

拾遺　あしねはふうきはうへこそつれなけれしたはえならす思ふ心を

後頼　**あはれにもみさほにもゆる蛍かなこゑたてつへき此世と思に**

今案みさほつくるとはしらすかほなる心也　松のみさほといふも霜雪をもしらすときはにつねある事をいふ　下の詞にみさほにもてつけてといふもつねにかはらぬ心也

【2】『花鳥余情』若紫巻

くらふ山にやとりもとらましくおほえ給へとあやにくな

るみしか夜にて

六帖二くらふ山くらしと名にはたてれともいもかりといはゝよるもこえなん

今案此歌いたくかなはねともくらふ山をくらきかたによめる歌なれはこゝの詞にすこしき便あるにや心は夜かはやくあくれはしはらくくらき所にやとりはとらまほしきと也　京極中納言こゝの詞をとりてよめる歌

兼厭暁恋今夜たにくらふの山に宿もかな暁しらぬ夢やさめぬと

やとりせぬくらふの山を恨つゝはかなの春の夢の枕や

【3】『花鳥余情』紅葉賀巻

いりあやのほと

俊頼歌云

郭公二村山をたつねみん入あやのこゑやけふはまきると

顕昭注云舞にはいりあやとてさらにとて返しておもしろくまふ事によせて郭公のいりあやのこゑやまきるとよめる也云々　若菜巻上云かしは木の右衛門督落そんのいりあやをまふと　六条院の御賀の事なり

【4】『花鳥余情』花宴巻

よにしらぬ心ちこそすれ在明の月の行ゑを空にまかへて

吉水僧正歌

あり明の月のゆくゑをなかめてそ野寺のかねはきくへかりける

此歌をとりてよみ給へる也　源氏をは詞をも歌をもとりてよむへき也　俊成卿も源氏みさらん歌よみは無念の事といへり　又花のえんの巻はことにすくれて艶なる巻とも申給へり

【5】『花鳥余情』花宴巻

ほかのちりなんとやをしへられたりけん

古今歌にほかのちりなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれは歌のこと葉になき事をも心をとりてかくかける也　定家卿の歌はおほくはこの物語よりいてたりとみえ侍り

いこまやまいさむるみねにゐる雲のうきて思ひのきゆる日もなし

とよめるは本歌の雲なかくしそといへるは雲をいさめたる心なれはやかていさむるみねと心をとりてよみ侍る也　こゝの詞に相にたるやうなれはよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也　大方源氏なとを一見するは歌なとによまむ為也　読んにとりては本歌本説を用へきほとをしらすしてはいかゝと思ひ給へ侍れはいときなき人のためしるし付侍る也

【6】『花鳥余情』葵巻
木の葉よりもろき御涙
俊成卿歌こゝの詞をとりてよめるにや
嵐吹峯の木のはの日にそへてもろく成ゆくわか涙かな

【7】『花鳥余情』須磨巻
あかつきかけて月いつる比なれは
定家卿の此詞をとりてよみ侍る歌　内大臣家の百首
春はたゝ霞ばかりの山のはに暁かけて月いつるころ

【8】『花鳥余情』初音巻
はかためのいはゐしてもちゐかゝみさへとりよせて
歯固は元三の日の事也　歯はよはひ也　すなはちよはひともよめり　歯固はよはひをかたむる心也　たかつき六本におしきをすゆ　一のたいにもちゐ大根たち花をもる也　このもちゐは近江の火きりのもちゐをもはらもちふへし　これによりてやかてその国のかゝみの山の歌をなかむる也　俊頼歌
我をのみ世にももちゐのかゝみくささきさかへたる影そうかへる

【9】『花鳥余情』藤裏葉巻
あさ緑わか葉の菊を露にてもこき紫の色とかけきや
袍色は衣服令一位深紫二三位浅紫四位深緋五位浅緋六位深緑七位浅緑八位深縹初位浅縹也　（中略）
京極中納言も参議従三位の時　紫の色こきまてはしらさりき御代のはしめの天の羽衣　とよめり　後撰の歌にもとつきていへる也

【10】『花鳥余情』橋姫巻
山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我涙かな
俊成卿歌
あらしふくみねの木のはの日にそへてもろく成行わか涙哉
この源氏の歌をとりて読侍り

【11】『花鳥余情』椎本巻
うらめしといふ人もありけるさとの名の
うらめしといふさとの名は古今の歌に世をうち山身を宇治はしなとよめる心をとりていへる也　この源氏の詞をとりてよめる歌　元久元年七月宇治御幸の時夜恋の題にて定家卿
まろ人の山ちの月もとをけれは里の名つらきかたしきの床
又名所の歌に家隆卿
初霜のなれもおきゐてさゆる夜に里のなうらみうつ衣かな

【12】『花鳥余情』総角巻
あけまきになかき契をむすひこめおなし心によりもあは

なん

催馬楽呂歌

あけまきやひろはかりやさかりてねたれともまろひあひにけりかよりあひにけり

今案ひろはかりは八尺はかり也　さかりてはいとのさかりたるを人さかりてねたるにそへたる也　定家卿歌にも

なかくしもむすはさりける契ゆへなにあけまきのよりあひにけん

【13】『花鳥余情』浮舟巻

さむきすさきにたてるかさゝきのすかたも

かさゝきといふはまつは鵲のからす也　しかれともこの物語には鷺をかさゝきといへり　かさゝきのはしを絵なとにかくにはからすをもかき又しらさきをもかく也　家隆卿歌

かさゝきのわたすやいつこゆふしもの雲井に白き嶺のかけはし

この歌はかさゝきの色を白物にたとへられたり　所詮かよはして用へき事にこそ　わすれ草を萱草ともいひ又忍草の異名ともいふかことし

Ⅱ『伊勢物語愚見抄』の後人詠注記

【14】『伊勢物語愚見抄』（再稿本）五十九段

六十、すみわひぬいまはかきりと山さとに身をかくすへきやともとめてん

『後撰集』の第十五に、世の中を思うして業平のよめる歌、

すみわひぬいまはかきりの山さとにつま木こるへきやともとめてん

同歌の第四句、両説ある也。いつれも和歌にはとりてよむへき也。俊成卿歌、

すみわひて身をかくすへき山さとにあまりくまなき夜はの月哉

いまはとてつま木こるへきやとの松千代をは君と猶いのるかな

【15】『伊勢物語愚見抄』（再稿本）六十九段

われてあはんといふ。

われては、わりなくしてあはんといふ詞也。『金葉集』、永実歌、

三日月のおほろけならぬ恋しさにわれてそいつる雲のうへより

この歌のわれては、わりなき心にかなへり。又『詞花集』、新院御製

瀬をはやみ岩にせかるゝ谷水のわれても末にあ

はんとそ思ふ

これは、わかれてもの心也。

【16】『伊勢物語愚見抄』（再稿本）九十六段

かのおとこ、あまのさかてをうちてなん、のろひをるなる。

あまのさかてうつとは、人を呪詛する事をいふ。地神第四代彦火火出見尊と申神のこのかみ、火闌降命と申おはしましけり。この二の神、さちかへをし給ひし時、このかみのつりはりをうしなひ給ひしを、それ返したへとなをさりならすせめたまひしかは、もしやとうみのほとりをたつねありき給ひし時、しほつゝの翁といふ神のはかり事により、海の宮へ入給て、やうくとつりはりをたつねいたして、あにのみことに返し給ふ時、うみの神のおしへによりて、さまくのろくしき事ともをいひつゝけて、うしろてにてはりをなけあたへ給ひし事あり。くはしく『日本紀』の第二の巻にみえたり。かゝる事のをこりよりはしまりて、人をのろふとては、手をうしろへやりてたゝく事ありとかや。それを、あまのさかてうつ、とはいふなり。定家卿、こゝのこと葉をとりてよめるうた、

をのれのみあまのさかてをうつたへにふりしく木の葉あとたにもなし

【17】『伊勢物語愚見抄』（再稿本）百十六段

百十七、浪間よりみゆるこしまのはまひさし久しくなりぬ君にあひみて

はまひさしの事、『知顕集』なとにさまく申侍れと、みないたつら事とそ覚え侍る。はまひさしは、たゝ浜にある家をいふへし。とまひさし、いたひさしなといふかことし。定家卿、熊野御幸の御ともにまいりて、新宮三首の中、庭上冬菊といへる題にてよめる歌、此物かたりを本歌にとれり。

霜をかぬ南の海のはまひさし久しくのこる秋のしらきく

此歌、はまの家の心ならねは、題の庭の文字落題になる也。又、物語のはまひさしを、浜ひさきとかきたる本あり。よりきたれるによりて、ともに本歌にはとるへき也。君にあひみては、あひみぬといふ詞也。

【18】『伊勢物語愚見抄』（再稿本）百二十四段

百廿五、おもふ事いはてそたゝにやみぬへき我とひとしき人しなけれは

心の中におもふ事も、きゝしるへき人なけれは、いはぬならひ也。これは、あさゆふのことくさ、又、教内教外の道にいたるまても、知音にあはねはいはれぬ物也。中将の心、何事としりかたし。それを房

内秘密の術なと釈せる説あり。大なるあやまり也。なに事と条目をいふ程ならは、はや人にもいひきかせたるになりぬ。さるにとりては、物かたりにもしかくのいはれをかくへきか。かきあらはさぬにてしりぬ、えもいはぬ事なるへし。慈鎮和尚歌、

おもふ事なと問ふ人のなかるらんあふけは空に月そさやけき

とよみ給へるも、此物かたりの歌をおもへるにや。

※後人詠をゴシック、詠者を二重傍線、物語の詞を採ったという指摘部分を傍線で示した。

［付記］本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費・課題番号：24·1276）を受けた成果の一部である。

（まつもと・おおき　本学大学院博士後期課程
・日本学術振興会特別研究員）

本研究会の活動（2012年4月～2012年9月）

第238回4月28日（土）

『源氏物語』正編における季節表現の構想的利用　瓦井　裕子

『続千載和歌集』「誹諧歌」を読む
―二条家撰者の勅撰集編集術―　村山　識

第239回5月19日（土）

『枕草子』の「をかし」「めでたし」「笑ひ」について
―日記的章段を中心に―　楊　也

源氏物語の享受の一考察
―謡曲「須磨源氏」の源氏の呼称を中心として―　越野　優子

第240回6月30日（土）

『河海抄』巻九における諸本異同とその特徴　松本　大

真名本『曽我物語』における曽我兄弟の母
―出家と女人往生の様相―　ルーンピロム・カナパット

第241回8月25日（土）

『枕草子』自賛譚の一考察　金　起台

サイデンステッカー訳『蜻蛉日記』をめぐって
―新出資料『蜻蛉日記新釈』の紹介―　丹下　暖子